

● 国の「血の日曜日」の暴虐とそれにつづく恐怖政治の断行に対し、アメリカをはじめとする西側諸国はもとより、ポーランドやハンガリーのような民主化を進めつつある社会主義国、そして今回、「人民の波」に迎えられたゴルバチョフ書記長指導下のソ連も、厳しい批判を展開している。だが、このような世界的な中国への激しい批判の中で、日本政府・外交当局の出入が注目されていたにもかかわらず、就任早々の宇野首相は、武力によって平定した中国の事態に胸をなでおろして安堵するかの様な姿勢を示したのである。外交当局も、当初から民主化運動にたかきくって傍観し、あの大惨劇に至ってようやく憂慮の念を示したにすぎなかった。

こうした日本政府の姿勢に対し、私自身もテレビや新聞などを通じて異議を申し立ててきたし、経済界や国民世論の批判もよって、そして何よりアメリカから、

はじめとする西側諸国の厳しい

日本への眼差しによって当局もやや態度を変えたのだが、時すでに遅く少なくとも人権や民主主義に関しては、中国と同じレベルの鈍感な国、結局は単なるエコノミックス・クアニマルだと世界から批判されつつある。そもそも、日中友好関係が我が国にとって死活的に重要であるならば、その関係をズタズタに引き裂いたばかりか、中国の近代化にとっても取り返しのつかないダメージをもたらした今回の事態を回避させるため、もっと早くから積極的な外交努力をすべきであった。それが中国に対して経済的に最も影響力を持つ友好国として、当然のつとめであったといえるであろう。

中鳴嶺雄



「またまた、我が国政府はリクルートスキヤンダルにゆれていて、それどころではなかったといえるかも知れないが、しかし、流血の事態がまさに起きようとしている時期に、たかをくくって傍観し、事態の深刻化に対したた手をこまねいてきた姿そのものが、批判されて当然といえる。」

宇野首相は、日本に中国に対する戦争責任の問題があるため、アメリカや西側諸国とは同じ立場に立ち得ない、というようなきれいなことを並べたてていたが、中国の学生や市民が血の弾圧を受け、さらに相次ぐ処刑が行われつつある現実、日中の歴史的過去とはまったく次元の異なる問題で

ある。ましてや、封建的軍事ファシスト独裁のごとき鄧小平、李鵬、楊尚昆体制に対し、日本国民は誰一人として負い目を持つ者などいないはずだ。なぜ我が国は、もっと早くいべきことをいわなかったのか。その最大の原因は、私がいうところの対中国位負け外交という体質にある。今回の出来事によって、日中友好関係の偽善的な本質も明白に暴露されたのだと言わざるを得ない。

なかじまみねお 1936年宇野重吉生まれ、東京大学大学院国際関係論課程修了、東京外国語大学大教授(現代中国論、国際関係論)、北京(北京)上・下京華書院で81年度サントリア学芸賞受賞、食通、特に中華料理に精通、趣味のバイオリンはプロ並み、近著は、中国に呪縛される日本(文芸春秋など)。

北京惨事の対応で分った日本の「位負け」外交

今、言っておきたいこと
この人の場合
異論アリ!